

親友から「いっぱいいい出会いをして、幸せになろうね」とメールをもらった。つらいとき、必ずよりそってくれる。電話で声を聞くだけで元気になった。

「かつて『子ども』だったあなたのための子育て講座」というタイトルを見たとき、「あ！わたしのこと」と感じた。

自己紹介のとき、「子どもの頃のわたし」に愛情をこめて紹介しようと思った。愛情をこめてという部分に詰まるものを感じた。許してあげられないということ「許して」あげようという講師の遠矢さんの言葉。○か×の世界しか見えなかったわたしは、△や「どっちでもいい」という選択肢を知る。ほしくて「ほしくない」という子だった。自分が何をほしいのかわからなかった。どんなわたしでも無条件に認められるなんて聞いたことな

かった。

また、わたしが子どもだった頃、「子どもと大人の境界線」を親から超えられたと感じたときは、の問いかけに何も浮かんでこなかった。親となった今のわたしが、子どもとの境界線を越えたことなら思い出せるのに。数日後、わたしと親との間には境界線がなかったことに気づいた。

だから、子ども時代を抱きしめることにも抵抗があったのかもしれない。今のわたしにできることは、ちいさかったわたしの話を聴いてあげること。そのときそのとき、親に受け止めてほしかった本当の気持ちを、人の親になれた今、毎日少しずつでもいいから、ゆったり時間をとって聴いてお話ししたいと思った。

昔のつらかったことがあるから、今の幸せを何倍にも大きく

感じられる。人生にいらない経験は何ひとつない。でも、もうすんだことはふりかえらなくてもいいと思っていた。

子ども時代の影響はおとなになって大きくでる。人間関係がうまくいかない時、封印した部分が原因であることが多かった。そこをひとりで見つめる自信がなかった。わたしがこわれてしまいうまく、こわかった。記憶の底に埋めて消してしまいたかった。

一昨年、父をなくしてから、ふとわかったことがある。それは、親は親なりにそのときそのときの精一杯の愛情で育ててくれたということ。親のいろんな愛情表現にとまどうことがあったとしても、「大切に育てられたこと」は、わたしに大きな安らぎをくれた。

子育てに失敗なんてない。わたしはそう思う。

わたしは、父のおだやかな最期の顔を見て、父が本当に伝えたいことを受けとって生きていく。わたしの人生はわたしのもの。なにが起こったとし

ても、選んでつかんだのは、このわたし。

困ったことがある時、「そんなこともあるさ」という夫の言葉になじめなかった結婚当初。10年すぎて、やっとわかりはじめたような気がする。

子どもたちには、より多くの選択肢があることを伝え、生まれてきた喜びを味わえる毎日ですごしてほしい。うれしいことができ、それが日常の中でひとつでも増える日々をすこしてほしい。

マイペースはわたしのペースでいい。まわりを観ることも時には必要だろうけど、まず一番先にわたしを見つめて、わたしに問いかけ答えをもらおう。それが真実であることを信じて、これからも歩いていきたい。自分の中にわいてくる感情を大切にしていきたい。

わたしの感覚はまちがってはいなかったと信じられた時期に、この連続講座に参加でき、うれしかった。みなさん、本当にありがとうございます。

子育て講座受講生の声

子育て講座受講生 高瀬 陽子